

〈研究ノート〉

ME-CUSS 報告 (大学のシニアプログラムを 考える会) : 新たなフロンティアとの出会い

湯 浅 恭 子

目次

はじめに

第一章 ロジャーズ論文の翻訳

1. 第一章 (要約)
2. 第二章 (要約)
3. 第三章 (全訳)

第二章 ワークショップ報告 (模擬シニア大学)

第三章 米国のエルダーホステル

第四章 日本のエルダーホステル

結 論 今後の展望

はじめに

「高齢化とは、新たなフロンティア (精神とスピリチュアリティの成長) の始まりである。」
(“America the Wise” by Dr. Roszak, 1999)

「好奇心があるところに老化は無！」これは、ミネソタ州のシニア大学 (私立聖スコラスティカ大学) の標語である。教育を求める層があれば、それが18歳人口層でも、60代以上の層であっても、その集団に教育を提供 (サーブ) することが地域社会に対する大学の使命である、との認識から始められたのが、米国におけるシニア大学である。「サーブ (serve)」とは、人に「仕える」、役に立つことをする、または、神へ「捧げる礼拝」から

来た言葉である。

米国では大学におけるシニア・プログラムが、“Learning in Retirement（退職後学習プログラム）”と呼ばれている。通常クレジットなしの教育（単位の取得を目指さない）だが、学問的に高いレベルの学習内容を提供する。試験はなく、授業料も高額ではない。（6週間 35～50 ドル）キャリアアップを目指す成人の社会人教育とは異なるシステムで運営され、ジェロントロジーの学問的研究対象である。

ジェロントロジー（老年学）が、米国ではすでに学問として成立し、医学・社会学・心理学・経済学・法律学・人口学などの専門家が力を合わせているが、日本ではジェロントロジーの理解普及が始まり、昨今ジェロントロジー的視点からの研究が、人生の QOL（質）、または、ウェルビーイング（well-being / スピリチュアルな生きがいのある豊かな人生）としての社会資本の提供という意味でも着目されるようになってきている。

本研究ノートは、「新たなフロンティア」と日本社会との関わりについてジェロントロジー研究の「ロジャーズ論文」と札幌大学での2回のワークショップに基づいて考察した結果報告である。日本における大学のシニア・プログラムと地域社会との関係に関する提言と展望を目的にする。ロジャーズ論文は、「新たなフロンティアとの出会い」を基本的理解の前提とし、フロンティアの出会いとは、精神とスピリチュアリティの成長を意味している。「高齢化とは、新たなフロンティアの始まりである。」（“America the Wise” by Dr. Roszak, 1999）

本研究ノートは、二者（ミネソタ州ダールズ市民サリー・ロジャーズ+筆者）の共同研究活動の要約であり、以下の3種類の活動報告である。（1. 翻訳, 2. 模擬シニア大学体験, 3. 提案）本研究ノートは、以下の3部から構成されている。

1. サリー・ロジャーズさんの修士論文「シニア対象生涯学習プログラム（Lifelong Learning Programs For Elder Adults）」（略称「ロジャーズ論文」）の翻訳,
2. ワークショップ参加希望者（ME-CUSS メンバー）を一般募集。（模擬シニア大学, ME-CUSS メンバーの募集用紙, 添付1）
3. ME-CUSS の議論で出された提案と日本（大阪・東京・札幌）のエルダーホステルの関係者へのインタビューに基づく実態調査の結果。

本研究ノートの第一章の翻訳は、サリー・ロジャーズさんが2006年8月にミネソタ州ベテル大学院から授与された老年学（ジェロントロジー）に関する修士論文「シニア対象生涯学習プログラム（Lifelong Learning Programs For Elder Adults）」の三章の翻訳である。（「ロジャーズ論文」） 翻訳は、ME-CUSS の4人のシニア市民と湯浅が担当した。（*ミネソタ州ベテル大学院はシニア大学ではなく通常の大学の大学院である。）

ロジャーズ論文三章の翻訳分担は次のとおりである。翻訳「研究結果1～9＋要約」の「研究結果1, 2, 3, と7」を4人の参加者（M1, 2, F1, 2）が翻訳し、残りは湯浅が担当した。（ME-CUSS = The Meeting To Consider University Senior In Sapporo, 「大学のシニアプログラムを考える会」の略称）札幌市及び周辺に住むシニアメンバー4名（60代から80までの男性2名M1, 2, 女性2名F1, 2）から成る。（M1：元ビジネスマン、英語のボランティア通訳、ライオンズクラブメンバー、M2：元行政マン、英語のボランティア通訳、JICAシニアボランティア、F1：元教員、現在茶道教授、茶道紹介のアメリカツアーを長年経験、F2：主婦、英語のボランティア通訳、英国ホームステイの一人旅を企画計画実行。）

研究ノート第二章は、模擬シニア大学体験として、翻訳内容に関するME-CUSSとの2回のクラスでの議論要約である。「一回目：2006年10月21日（土）、二回目：2006年11月11日（土）」

研究ノート第三章は、札幌におけるエルダーホステルを含む大学が行うシニア大学へのME-CUSSによる提案と、日本では米国のような大学が開催するシニア大学の実例はないが、大阪と東京にシニア大学の一環のエルダーホステルの民間組織についての、エルダーホステルに関する日本での実情調査報告である。北海道YMCA主事藤田寛氏等のエルダーホステル関連の札幌市内関係者、東京に本社がある特定非営利活動法人「エルダー旅倶楽部」の理事長大社充氏への電話インタビュー、及び大阪に本部を置くNPO法人「エルダーホステル協会」専務理事大原美和子氏へのメールによるインタビュー結果に基づいている。

ロジャーズさんは、ミネソタ州ドルーズ市在住のシニア世代である。ミネソタ州の人口（465万）は北海道とほぼ同規模である。州成立は1858年、開拓100年の北海道に近い。全米の中では農畜産州であることも北海道と特徴が共通する。ドルーズ市は、ツイン・シティ（ミネアポリス、セントポール、約300万）に次ぐミネソタ州第三の都市（約9万人）であるが、ドルーズ市民の0.03%がシニア大学在籍者である。ロジャーズ論文は、ドルーズ市を中心とした周辺地域に住むシニアが参加するシニア大学の中でも私立大学聖スコラスティカ大学（カトリック系総合大学）が提供する「エメリタス（名誉大学）・プログラム」という名称のシニア大学を特に取り上げ、エメリタス・プログラムを中心として調査、研究を行った。

ロジャーズ論文では、1)「ジェロントロジー・老人学（GERONTOLOGY）」、2)「エイジング（aging）」、3)「スピリチュアリティ（spirituality）」の用語理解を前提に書かれ

ているため、簡単な解説を次に述べる。

老年学・ジェロントロジー（GERONTOLOGY）とは、ウェブスター辞書（The New International Webster's comprehensive dictionary）によると「1. 加齢と高齢者に関わる問題についての科学的な学問, 2. 老人医学（the scientific study of the processes and phenomena of aging, and geriatrics）」とある。「加齢のプロセス」と「高齢者の状態」という二つの異なった研究領域を持ち、高齢者への生理的、医学的、心理学的対応と、加齢による人間関係や社会関係の変化、それにともなう心理や問題の変化を扱う学問である。その特徴は、

学際的。自然科学、人文科学、社会科学という縦割りの科学を超えた、学際的、総合的な学問であること。

実践的。アカデミックというより、高齢者の QOL（生活の質）を高めるという実用的な側面が大であること。「ロジャーズ論文」では、「Well-Being（生きがいのある豊かな人生）」ということばが使われている。

米国的。米国で生まれ、米国で育った学問である。「老いは負け」「キリスト教的倫理観」など米国文化の影響が大であること等である。「ロジャーズ論文」では、スピリチュアリティ（spirituality）の理解が前提になっている。

ジェロントロジーは、米国退職者協会（AARP）の財政的、組織的なサポートを得て、学問的に大きく注目され、1970 年代の生涯発達研究、1980 年代の知能研究、1990 年代のエイジズム（老人差別）克服活動等を通じて発展してきている。特に「加齢とともにあらゆる機能が衰退する」という老人観を否定し、「すべてが衰退するとは云えない」や「加齢とともにあらわれる円熟さ」と言ったポジティブな面に着目する。「ロジャーズ論文」の 7-1 では、聖スコラスティカ大学のホームページが、シニア大学について「好奇心のあるところに老化は無！」（“America the Wise” by Dr. Roszak, 1999）や、「人生のあらゆる年代の人々を変動する世界に向けて備える」ポジティブなプログラムを強調している。

エイジング（aging）は、ジェロントロジーの中心課題の一つである。それを日本語に訳すと、「加齢」「老化」になるが、日本語では二つの意味は異なる。「加齢」とは、物理的な人間の生の受精から死に至るまでの時間の経過のことである。それに対して「老化」とは、加齢に伴って生じる、心身の変化のことで、特に生涯の後半期の変化を言う。

米国の私立大学の主な特徴は、スピリチュアリティに基づく高等教育機関としての役割があり、公立とは異なる特徴を有しているケースが多いことが、論文の前提になっている。

「スピリチュアリティ（spirituality）」の理解が米国の生涯教育の根底であり、ロジャーズ論文でも「スピリチュアリティ（spirituality）」が中心テーマである。しかしながら、こ

の用語を日本語でどのように理解したらよいのかが日本では議論となっている。WHO（世界保健機構）総会が、健康の定義に、身体的、精神的、社会的に付け加えて、さらに、スピリチュアリティを1999年度に入れたが、スピリチュアリティをどう日本語に翻訳するか、その時以来の問題になっている。「スピリチュアリティを霊的と訳すと、日本語の語感としては、本来、意図されたことと異なることを連想してしまうのではないかという懸念がある」と東京基督教大学教授の稲垣久和は語る。

スピリチュアリティという言葉は、必ずしも「身体的感覚を通して経験されるものではなく」、また、「日常的言語で表現され尽くされるものではない」が、「人間の条件の根源的なもの」に適用されるものと見なす必要がある。それは、「他者との関係」でなければならない。「有神論宗教の信者にとっては神との関係」でなければならない。それは「個人のアイデンティティの普遍的研究、すなわち、死、苦難、美、また善や悪との遭遇というような挑戦的な経験」と関係がある。それは「人生の意味や目的およびそれによって生きる価値の探求」と関わるものである。（稲垣久和著『宗教と公共哲学—生活世界のスピリチュアリティ』東京大学出版会、p. 61）スピリチュアリティとは、「人間の条件の根源的なもの」、「他者との関係、死、苦難、美、価値の探求」に関わる経験である。キリスト者にとっては神イエス・キリストとの関係を指している。（「A.E. マクグラス著『キリスト教の霊性』の訳者・稲垣久和氏の訳者あとがき」2006. 2）

第一章 ロジャーズ論文の翻訳

「シニア対象生涯学習プログラム（Lifelong Learning Programs For Elder Adults）」の翻訳

1. 第一章（要約）（1. 研究目的、2. 基本的理解、3. 探求課題、4. 重要性）

1. 本論文の目的は、生涯にわたる健康の重要性（肉体の健康、精神の健康、スピリチュアリティの健康）の認識、大学が提供するシニア教育の現状認識とその可能性についての研究である。

2. 本論文は、他者との関係のなかで行われるのが教育（全年代とも）であるという基本的理解をしている。（学生間、学生と教師間）

3. 本研究の探求課題は、以下の2点である。1）シニアが大学の生涯教育に参加する理由とは何か？2）プログラムの内容はどうかあるべきか？（このプログラムは、スピリチュアリティと高齢化とどう関わるのか？大学教育機関が提供できないプログラムとは何か？）

4. 本研究の重要性は、米国全人口の12.4%が65歳以上(2000)、2030年までに、20%になる見込みである。シニア向け教育プログラム(ミネソタ)は、十分な数とは言えず、検討の必要性を認識する。「高齢化とは、新たなフロンティア(精神とスピリチュアリティの成長)の始まりである。」(“America the Wise” by Dr. Roszak, 1999)

2. 第二章：関係文献の検証(要約)

研究の対象年齢層は、55歳以上の成人であり、対象教育機関は、ミネソタ州私立大学(キリスト教系)のシニア・プログラム及び今後導入を考慮中の大学。

大学がシニアの生涯教育へ参加する理由は、4分野に分けて考えることができる。(Gerald, 1994: Wacker, Roberto and Piper, 2002; McClusky, 1974)

1. 一生を通して新たな分野を学ぶ意欲がある(認知的理由: cognitive),
2. 人生の質的向上を目指す(心理学的理由: psychological),
3. 人間関係の拡大(社会的理由: sociological),
4. スピリチュアリティ(spiritual)

ミネソタ州私立大学の生涯教育の実績は、ミネソタ州私立大学審議会所属19大学中12大学が、シニア向け学習プログラムあり。全米高等教育の一環として行われている。私立大学のほうが、シニア層の教育プログラムへの関心が高い。「シニアは、人生経験を教室へ運んで来る。教育者にとってまたとないチャンスである。」(p. 224) Roszak (1998) 「リタイアが人生からの隠退や撤退というのは、神話である。」(p. 8) Merriam and Caffarella (1999)

ミネソタ州私立大学審議会の大学は以下の通りである。Augsburg College・Bethany Lutheran College Bethel University・Carleton College・College of Saint Benedict・College of St. Scholastica・Concordia College (Moorhead)・Concordia University (St. Paul)・Gustavus Adolphus College・Hamline University・Macalester College・Minneapolis College of Art and Design・Saint John's University・Saint Mary's University of Minnesota・St. Olaf College・University of St. Thomas

シニア・プログラムを提供する大学機関から見たメリットには、多くの国民のシニア教育への関心の高さ、彼等の政治力の高さがある。現在米国では、65歳以上の国民(全体の13%以上)のその30%以上の国民が生涯教育に参加している。Manheimer (2002)の統計によると、AAAR等の政府へのロビー活動がある。大学がシニア教育を開始する時、既存の施設の利用(図書館、コンピューター等)、専任教員の活用、既存学習プログラムのノウハウの蓄積等が利用できるメリットである。「新たなフロンティアの創出」21世紀

の教育の新たな分野と考えている。

3. 第三章：研究の方法と研究の結果（全訳）（ME-CUSS メンバーとの共同翻訳）

本論文の目的は、第一にシニア世代の生涯教育への参加動機と主催大学側のメリットに関する研究である。第二にミネソタ州私立大学の特に信仰的背景の大学によるシニア対象プログラムの検証にある。シニア・プログラムを現在実施していない大学が将来導入を考慮する際に有効な提案も行う。本研究はミネソタ州私立大学審議会参加大学 17 校とその他大学 2 校を対象とする。

生涯教育参加者と主催大学に関する質問

シニア・プログラム参加メンバーとシニア・プログラムの主催大学へのインタビューの際に、本研究の目的の追求に使われた質問は以下の通りである。

1. 生涯学習に関心を持つシニアが大学教育（55 歳以上対象）に参加する利点は何か？
2. 既存の大学特にミネソタ州内の私立大学が提供する成人教育の検証
3. シニア・プログラムを主催する大学の担当者へのインタビュー（シニアの興味や要求にどのように応えているか？ スピリチュアリティへの対応。シニア大学を開校するメリットは何か？）
4. シニア・プログラムを受講しているメンバーへのインタビュー（参加・動機理由調査。スピリチュアリティと高齢化との関係。大学への要望）
5. ダルース市（ミネソタ州）聖スコラスティカ大学のエメリタス・シニア大学を集中調査

研究結果 1：生涯学習に参加する動機

文献を再検討した結果、生涯学習プログラムに参加する動機の探求が、シニア世代の必要性和興味の所在を確認することを可能にした。本研究におけるインタビューは、キム&メリアム（2004）の研究と AARP（米国退職者協会）の生涯学習に関する研究結果（2000）、聖スコラスティカ大学エメリタス・シニア大学参加者に関する修士研究（ジェラルド、1994）を基に行われた。

AARP（2000）の調査対象者は、50 歳以上である。調査対象者 508 名は電話インタビューで連絡をとり、511 名は同じ質問にインターネットの調査に答えた。学習に関心を示した上位 3 つの理由と割合は、「世界で起こっていることに遅れずについてゆく（93%）、本

人自身のスピリチュアルな成長や個人的成長のため (92%), 何か新しいことを学ぶ単純な喜び (92%)」(p. 2) となっている。メリアム&キム (2004) の研究では, 「退職者のための学習研究所 (the Institute for Learning in Retirement) <http://www.hilr.harvard.edu/>」の参加者の 87.3% の年齢は 61 歳から 80 歳の間であった。その調査によると, 学習に対する関心の主な理由は二つあるが, その一つは認知的 (cognitive) な理由である。何かに役に立つ (知的好奇心, 学習意欲, 何かの目的に向かって行う) ことや, 何かを表現する (自己成長, 自己満足) ことを求めることである。

第二は, 社会的理由である。仲間との交流。旧友との時間や新しい友人を作る機会。例えば, ジュディス・ジェラルド (1994) は, エメリタス・シニア大学の参加者への一般的調査で 4 人の会員を個人的にインタビューをした。彼女の調査によると, 学習者が生涯学習クラスの参加に喜びを感じるのは, 認知的満足と社会的な活動が理由であることが判明した。実際にジェラルドは「参加者で最も強力な理由は学習志向であり, 単純に新しい知識を知るために教育を継続する人たちの中に分類することができる」と報告している。(p. 46) これらの認知的な興味には, 人生の若い時期に学んだことや訓練をうけた学科に加えてさらに新たな学科を学ぶ意欲が入ってくる。

それ以外の「活動志向」の学習者 (p. 46) に分類されている人は「目標に到達するための良い方法」(p. 46) のクラスを選択している。彼等は「活動的でありたい」と願い, 学習は価値ある楽しみであると述べている。彼等は通常特定の一つの学科のクラスへの関心よりは, 多くの分野に対する興味があり, 理由は千差万別である。学び続けることが長い間受け継がれたその家の価値観であり, 一人で本を読むよりクラスに通うことが良いと感じている人もいる。社会的交流が「豊かな人生」(ジェラルド, 1995, p. 45-46) に感じる人もいる。(訳: 武藤順)

研究結果 2-1: 高齢化とスピリチュアリティに対する興味

高齢者の関心事を調査する高齢化とスピリチュアリティに関する調査は, ミネソタ州の私立大学審議会の 17 大学と他の 2 校の私立大学を対象に行われた。回答は e メールや個別の手段によって行われた。18 大学のうち 12 大学がシニア生涯教育関連のプログラムを行っていることが明らかになった。シニア教育プログラムを提供する 12 大学は, スピリチュアリティや宗教関連のクラスの重要性に対する理解があると一般的に考えられている。クラスは参加者の興味に応じて編成され, クラスに参加するメンバーに合わせてプログラムを監督する代表者が計画を作成する。大学で持たれているクラスの種類は, 参加者の興味の方向性も示している。

生涯教育の全ての段階において興味あるテーマが「スピリチュアリティ」であることが、スピリチュアリティと教育に関する文献の検証から認知されている。

シニア世代の市民がスピリチュアリティ関連の学習への興味を増していることは、成人教育や特に宗教や神学の規律に関する著作の中で頻繁に指摘されている。特にスピリチュアリティの視点からの人生の見直しが、シニア層の高い関心事であることが記されている。例としてメリアム&カファレラ両博士はニュルンベルガー（Nuernberger）のこばを、共著「成人における教育—総合ガイド」（1999）において引用している。（1994, p. 109）「ニュルンベルガーは、4つのタイプの知識による内省を求めている。スピリチュアルな知識、直感的知識、本能的知識、分析または感覚的知識の4種類である。スピリチュアルな知識は、神秘的とも言える特性を持ち、変身する経験とも呼ぶことができる。このような知識が個々のアイデンティティを変容させ、最終的には真の知恵へと導かれる。（訳：石田久子）

研究結果2-2：高齢化とスピリチュアリティに対する興味

カールトン大学の元チャプレンであり神学者でもある宗教学者のデイビット・メイトランド（David Maitland）博士は年を重ねる経験とスピリチュアルな洞察について次のように語っている。著書「カウンターカルチャー的エイジング：人生の後半の生き方」（1991）の第一章は、「スピリチュアリティと高齢化、人生のバランスの回復」について述べている。人生の後半に至った人間はスピリチュアリティにおいて成長することができる。スピリチュアリティの成長が生きる力と成熟のよりどころになる。スピリチュアリティの成長によって力を得るために、人は「老いる」という任務を果たす。メイトランド博士は、シニア層の人々が人生の前半と同じように積極的生産性のある人生を求めて文化的チャレンジに応答するように求める。「自分の力で100% 支配することなく責任ある生き方があることを理解できるのは信仰による。だから、老化とは反文化的である。助けを受けて生きること、神が与えた人生のバランスの回復をはかることだからである。」（p. 32）

社会学者でありキリスト教弁証学者のデイビット・モベリ（David Moberg）博士は、人間のスピリチュアルな性質が、人生を通して、人生の長い年月の中で、年を重ねるごとに劇的に成長する現実を聖書に基づいて語っている。「セルフ・イメージの向上、老化による限界や損失を超えていく能力、障害や痛みその他の問題に対処する力について聖書の約束がある。この約束から力強く生きる高齢者がいる。」（モベリ，2001, p. 7）（訳：下田千代美）

研究結果3：高齢者生涯学習がもたらす利点

生涯学習プログラムに参加した男女双方の高齢者がインタビューに応じて語った。彼等の経験は、先の生涯学習に関する研究を支持するものであった。二組の夫婦と二人の女性に自由に回答できる形式のインタビューを行い、さらに一人の女性に電話によるインタビューを試みた。インタビューに先立ち、対象者に配った挨拶状と質問の内容は添付Aのとおりである。

報告者の全てが、生涯学習プログラムには知的刺激の利点や、講師や仲間との社会的交流に感謝した。彼等は、学習体験によって自分の日常生活を効果的に営むための精神力が維持されかつ強化されたと信じている。彼等の全てが教室の学習や討論を通して獲た新たな学習の喜びと人生の意義について語った。インタビューに応じた7人のうち3人は退職教員であった。男女とも生涯学習は精神的、社会的、身体的資質を高めるためのものとして是非必要であると語った。7人の対象者のうち5人が、個人的精神的人生の意義について考えることに関心を示した。

リンダ・J・ヴォゲイ (Linda J. Vogei) の著書「高齢者の霊性と宗教」(2001) の「老年期における精神的発達」という章は、老年期における精神的経験について語っている。その章の中の「管理する意義と魂を養う」という節は、多くの高齢者のために生涯学習が果たす役割の可能性について触れている。高齢者の生涯学習の基本的利点は、スピリチュアリティに対する学習が含まれてこそ存在価値があると考えられている。この学習には終わりの結果よりもむしろ生涯の過程を強調する方法として、スピリチュアリティの理解につながる学習が含まれる。その章では、高齢者はどのように発達し、学び、考え、感じ、生と死の意味を理解し、神と自己そして隣人を愛することができるよう行動するかを包括している。この著書は成人の教育者を対象としているが、ヴォゲイが明らかにしたスピリチュアリティのあり方を認識し、それによって励まされるなら、全ての成人が経験する過程になると考えられる。(訳：山下健一)

研究結果 4：大学の生涯学習プログラム

ミネソタ州の多くの大学がシニア対象の生涯学習プログラムを多くの機会に提供している。導入部で述べたように、本研究の中心はキリスト教の信念と教育の歴史的背景を持つ私立大学であり、ミネソタ州私立大学審議会加盟 17 校中 16 校が対象である。17 校中 1 校は背景が異なるので本研究の対象には含まれていない。審議会加盟校以外では、私立の大学 1 校と神学校 1 校が調査の対象に含まれている。

合計 18 大学中 6 校がシニア向け特別プログラムを行っている。6 大学中最古の例が 1973 年に開始、最も新しいケースは 1982 年に始めている。シニア向けプログラムがない

大学が2校あるが、これらの大学は地域社会主体のシニア向け生涯教育プログラムに対して積極的支援を行っている。現役と退職者両方の大学の教員が、地域主体のクラスの講師をしている。18大学の中で3大学は、22歳以上の成人を対象にした学位取得を目指した単位制の特別成人プログラムを提供し、55歳以上の参加者の聴講も許可している。しかし、このような種類の大学はシニアの参加人数に制限があり、通常一クラス2名までになっている。神学校にはシニア向けのクラスが全くない学校が1校あるが、55歳以上のシニアのかなり多くの人々が、一般成人向けクラスで聴講が許されるクラスに参加している。

本研究の対象18大学中4校が、現在はシニア向けプログラムが存在しないか、もしくは現在はそのプログラムに特別な関わりのない大学であるが、4大学とも将来的にはこの可能性を追求することに関心を示している。その中の大学のある事務担当者によると、現在その大学では、キャンパスの中にシニア用の大学施設の建設を考慮中であると語った。それが完成すると、今までの伝統的クラスに参加するシニアの学生に加えてさらに、高齢者向けの特別クラスの提供も可能性があると述べた。18大学中2大学からは返答がなかった。おそらくこの2大学にはシニア・プログラムがないことがウェブサイトから推察され、さらに通常のクラスへシニアが出席できる特別の条件の記述もなかった。以上の結果から、シニア対象の生涯学習特別プログラムを提供しているのは上記18大学中12大学、全体の66.6%に相当する。

研究結果5：生涯教育モデル

シニア世代を対象に個別の大学教育プログラムを行う大学や、地域社会をベースとしたプログラムに積極的に支援をしている大学は合計9大学ある。地域社会主体の講座は一般的に様々な名称で呼ばれている。（例：College of the Third Age, Cannon Valley Collegium, Communiversity）これらの講座は、参加学生の提案や講師の見識に基づいて開講されている。これ以外の5大学では、大学の通常の授業及びその他の成人クラスに様々な方法で成人が参加している。シニア教育に関りを持つ14大学中10大学が大学内もしくは地域社会の中のどちらの講座にも、スピリチュアリティもしくは宗教に関わるテーマが選ばれている。

プログラム全体の管理をする代表者（director）一名が担当者としているが、多くの場合は専任ではなく学部の事務職または教職員の兼務である。代表者の仕事には、予算管理、講座の最終決断、講師の依頼、広告その他の監督、講座の場所の設定などの責任が伴う。

シニア・プログラムには、シニアの参加メンバーとこの分野に関心のある教員から成る顧問団（advisory board）が存在する。顧問団はプログラムの方針の提言、メンバーと事

務管理の調節、講座選択への提言などを行う。高齢化とスピリチュアリティ関連のクラスはほぼ全ての講座に含まれている。宗教学やスピリチュアリティと明記の講座以外では、科学、宗教、倫理の分野名で明記されてはいるがスピリチュアリティを内容に含む講座もある。

講座の開講場所は、キャンパス内の場合もあるが、大学周辺の各都市の様々な場所で開講されているケースもある。一年間の学年暦を通して行われる授業は、大学構内と近隣の地域社会の両方で行われている。別のケースでは、エルダーホステルを主催している大学がある。「エルダーホステル」は毎年6月に5日間行なわれている。エルダーホステルの参加者は大学構内の宿泊施設もしくは地域社会に滞在する。大学施設と地域社会の施設の両方を利用する混合型が最も典型的である。「エルダーホステル」の参加者は大学構内で行われる授業のほうに楽しさを感じているのだが、構内の利用には駐車場その他のアクセスの面で不便な点があると、参加者からの感想で指摘されている。事務管理的には、教室の確保が問題になっている。

2番目に古い歴史を持つシニア大学は、全講座を大学以外のオフ・キャンパスで開講している。2002年の大学のホームページからの情報によると、約200講座に8千人近くの参加者があった。ツイン・シティー（セントポール市とミネアポリス市）とその周辺を合わせて50箇所以上で講座が開講され、地元の教会、コミュニティー・センター、シニア・リビング・センターが会場として使われている。

シニア生涯教育の資金は主催大学が拠出している。当該大学が管理代表者（director）の給与及び広告・事務経費を負担している。一部の大学はシニア・プログラムの寄付金収集に熱心に努力している。ミネソタ州人文科学委員会（NPO 法人）が、ガイドラインに該当する講座の資金を拠出しているケースもある。個人の財団や企業がシニア教育の援助に積極的な地域社会もある。

その他の資金源は、講座の種類によって金額が異なるが、一クラス約25ドルから85ドルが学生の授業費から出ている。先に述べた「エルダーホステル」は、5日間のコースで400ドルから520ドルほどの金額と、それ以外のサービス料として登録者一名につき15ドルかかる。シニア大学参加者への金銭的援助を目的に受講者への奨学資金や商品券提供を呼びかける広報活動が行われている。

研究結果6：大学が高齢者生涯教育を主催するメリットとは？

シニア教育を大学教育の機会に加えることが大学にとってもメリットがあると考えていることが、ミネソタ州私立大学審議会に所属する大学のホームページの資料や、各大学と

のeメールによる調査、生涯教育プログラムの代表者3名との面談から判明した。面談用の質問表（自由回答方式）は添付資料Bである。質問表は担当者との面談前に事前に配布された。

ある大学では早春のさわやかな緑の中、落ち着いた雰囲気のある壁に囲まれた中庭の小さな丸テーブルを囲んで面接を行った。この大学の担当者は、この庭に遺灰の散布をしたいと願い出た退職した教員が何人かいると語ってくれた。これらの教員の人生を代表する教育のスピリットを美しく表したと私は思った。

シニア教育が大学に与えるメリットに関する問に対してインタビューに応じてくれた担当者は、シニア教育が大学の使命感と直接的な関連にあると即答し、この点を強調した。

これらの見解は様々な点で、ある大学の次に示す考え方に基づく。

この大学のシニア教育プログラムは、大学のアウトリーチ・プログラム（地域貢献）の一環として行われている。

- ・生涯学習活動への使命感。この価値観を地域社会に伝える努力をする。
- ・教育の質的向上とは、相互に支えあう多様な社会にお互いに学び教えあう関係が存在するという認識。
- ・あらゆる年代の教育が個々の人間性を取り扱うものであり、知性や技術と共にスピリットや信仰に関わるものである。

相互への尊敬を礎とする大学の伝統は、教育的にも社会的にも、互いに学びあう地域社会に豊かな文脈を与える。

一番目の面談に応じてくれたシニア大学代表者は、建学の精神を実際的に応用した結果がシニア大学という形になったいきさつを語ってくれた。この経済学部長はエジプト系の民族的背景を持つ方で、1973年に高齢者が人生の実践的側面を管理する必要性に関心を持った。最初の講座では、財政と資産計画に関するクラスや、高齢者が可能な限り長期間独立した生活を楽しむために必要な助言に関する授業を行った。

二番目の代表者は、「エルダーホステル」が大学の建学の精神に基づいたシニア・プログラムの充実につながると考えた。この大学は画期的な「エルダーホステル」ウィークをこれまでの経験に基づいて主催している。「エルダーホステル」ウィークの様々な活動内容にはスピリチュアルな要素が含まれている。この大学教育に対する参加者からの声は、知的な議論やリクリエーションの時間から静かな環境の中での祈りの時間に至るまですべてに対して深い信頼感から出た肯定的反響であった。

三番目は神学校のシニア・プログラムの代表者だ。この大学の使命は活動的な聖職者の

人生だけでなく、高齢の聖職者の力と知恵からも学ぶことができると考えている。彼等は、最初は学生として大学に入り、次に講師として大学に関わり、常に学び続ける生涯をおくっている。

インタビューに応じてくれた代表者の全てが、大学は学習機会の提供によって地元住民から感謝を受けることになり大きなメリットになる、と語った。この社会からの大きな感謝は、高齢者と大学の伝統的プログラム双方に対する実際的サポートも含まれる。

研究結果 7-1：聖スコラスティカ大学のエメリタス・シニア大学（主催大学研究）

本研究対象のその他の大学と同様に、聖スコラスティカ大学のエメリタス・シニア・プログラムのクラスは、参加メンバーの要望や学部講師その他の関係者の要求に応じて計画された。1982年にエメリタス大学の開始時からのクラスの一覧表は添付Cにある。

この表の作成は、12ページからなる582クラスの資料を基に様々なトピックスを一般的分野に割り当てた。一つのクラスが複数のトピックスに相当する場合は、十進法の「1」に割り当ててある。

宗教とスピリチュアリティのクラスは、過去23年間にわたり4番目に最も要望の多いクラスであった。総計585のクラスのうち51.50は、宗教あるいはスピリチュアリティに関連したクラスである。これらのトピックスは、文章作成（過去の思い出・その他）、哲学、倫理、日常的問題のクラスとして分類されている。

アドバイザーの教員やシニア大学コーディネーターは、エメリタス計画は大学にとって有益な存在であると述べた。上記の大学同様に、シニア向けの生涯教育の提供は、ダルース市とその周辺地域で真剣な教育と誠実な活動を願う大学側の使命とビジョンの達成に直接関連していると、聖スコラスティカ大学の関係者は語った。大学のホームページには、「エメリタス大学、好奇心のあるところに老化は無！」や、「エメリタス計画は、聖スコラスティカ大学の使命の根本的中心を反映している。人生のあらゆる年代の人々を変動する世界に向けて備える。」とある。この文書は全て、「向学心」も含めて聖スコラスティカ大学の使命と価値観を要約している。その文書は、シニアにとっての学習の目的が「思考と行動を統合し、完全な人間性に向けて補足的働き」とも語る。（訳：石田久子）

研究結果 7-2：聖スコラスティカ大学のエメリタス・シニア大学（主催大学研究）

エメリタス・シニア・プログラムの資金は、一部は聖スコラスティカ大学のミネソタ人文学科委員会から、一部はわずかな額の寄付金から出ている。エメリタスのメンバーが支払う授業料は、ささやかな額である。最近の寄付金の収入は経済の一般的状況の影響を受

け、縮小している。プログラムの財政的安定性は絶えず懸念事項であり、今後も今まで以上に問題になると思われる。現在の資金源からの収入で必要性にしろうじて見合っている。ベビー・ブーマー世代の高齢者は、さらに高い料金を支払うことが可能であり、喜んで支払うことが可能になると考えられる。

しかしながら、大多数の高齢者の資産は、一般的認識以上に限られているという意見に同意する人が増えている。これは、米国国勢調査報告の「米国資産収入」が明確にしているように、米国の収入は2000年度の55-64歳代の平均的な収入は46,095米ドルであり、一方65歳以上の平均は23,578米ドルである。(Welniak, 2001)

プログラムに対する最大の将来への挑戦は、これらの財政的関心事と関連がある。大学の学部から講師を派遣することで、聖スコラスティカ大学の学部の支援を積み上げることが重要である。一つのクラスは6週間のコースであるので、講師への支払いは僅かな額である。大学のキャンパスに通学する参加者には距離に応じて払い戻し制度がある。

増大する高齢者人口は、エメリタス・シニア・プログラムにとって一つの新たな機会創出であるが、同時に一つの新たな挑戦の始まりでもある。プログラムの成長に従いリーダーシップの時間的責任が増大し、スタッフの負担も大きくなっている。目下のところ、エメリタス・コーディネーターは、エメリタス以外にも別の2件の大学の仕事を兼務している。スタッフの数が補充されると、資金の必要性に多くの時間を当てリーダーシップを発揮することができるので、プログラム全体に恩恵があると思われる。(訳：武藤順)

研究結果7-3：聖スコラスティカ大学のエメリタス・シニア大学（主催大学研究）

学部の指導教官はシニア大学の今後の重要な目標について次のように述べた。

ダールズ市内の別の場所に講座開設（オフ・キャンパス）を拡大していくこと。オフ・キャンパスは地域貢献活動（アウトリーチ活動）の活性化につながり、駐車場を始めとして大学施設の利用に関わる問題の解消につながる。9月から5月中旬に開講されるシニア大学の参加者と正規の授業の学生との間で駐車場確保が問題化している。プログラムの効力を改善し質の維持に努める必要がある。

現在のところ、授業は学期ごとにミネソタ州内のクロケット、シルバーベイ、ツーハーバース、バージニアの各都市で開催されている。聖スコラスティカ大学では3コースが開設されており、各クラスとも通常90分授業が6回行われている。2005年から2006年にかけてのクラスの開設は僅か12大学のみで、その数は最高42大学が開設した1990年代から急激に減少している。

・一般の人々のプログラムに対する認識を高めるためには、広い分野から優秀な講師を大

学外部から招くことができる。

このことは既に述べたシニア大学改革に有効な方法だと思われる。

学習の機会拡大のための技術向上を推進する。

ベビーブーム世代にはコンピューターの専門知識を有する人や、学習やコミュニケーションの手段としてコンピューターを楽しく利用する人たちが多くいる。

65歳以上のシニアにインターネットの使い方を指導するクラスを開設する。

高齢者は悪徳業者や商売人の詐欺の餌食になりやすい。高齢者がインターネットで詐欺に陥りやすい分野は健康や金銭問題がある。

・現在よりも精神的にも肉体的にも健やかなシニアが、大量に退職期を迎えようとしている今の状況に備えること。今まで以上により多くの大卒のシニア世代が登場し、退職後に大学が提供する教育プログラムに関心を示すようになる。（訳：山下健一）

研究結果 8：エメリタス・プログラムに関する所見

2005年8月23日に私は聖スカラスティカ大学エメリタス・プログラムの「2005年一日シニア大学体験」に参加した。午前9時半から午後1時半までのプログラムは最初に2名のゲストスピーカーによる講演から始まった。一番目は英国とチェコ共和国で教鞭を取ったフルブライト・スカラーのグレン・ソレンサン先生だった。「ミネソタ州最高教師賞」受賞のソレンサン先生は、教師が情熱を持って自分の科目を教えていくことの重要性和、公教育の成功に欠かせない学習の価値観を家庭教育の中で伝えていくことの大切さについて語った。さらに先生の教師としての個人的なゴールは、生涯を通じた学習意欲を自分が教える生徒の心に注入することであると語った。

2番目の講演者リサ・ランゲ・ラーセン先生は、ノルウェイ出身で第二外国語としての英語教授に関する修士を持っていた。ラーセン先生は「現代における民話の重要性」と題して話の語りが想像性の刺激になり、想像性が論理的思考と重要な関連性があることについて、アインシュタインとパヴロフの例から引用して自説を語った。

この講演の後の昼食時間は、テーブルを囲みながらの会話がはずむ時となった。（講演者の先生等と同じテーブルで話すことができる。）エメリタス・プログラムの社会的目的や友人を求めるといった目的にかなった行事であった。最後の一時間はアルナ・レナンさんとブランアン・ダックさんによるノルウェイのフォーク音楽の演奏があった。

エメリタス・プログラムのメンバーが約100名と新メンバー数人がこの行事「一日大学体験」に参加した。質の高い講演は、話し方も内容も、参加者全ての関心をひきつけた。本議題の後のQ & Aは、活発な時間になった。出席者から出された質問は、主題に対す

る彼等の関心の広さと高さを反映していた。私が座ったテーブルでも活発に意見が交換された興味深い会話になった。顔見知りの人々と初めて来た人々の両方が適当に混じった各参加者テーブルは、なごやかで親しい雰囲気を楽しんでいた。

「一日大学」に男性の参加者が少ないことに、私は興味深くかつ不思議に感じた。男性は、シニア大学の講座でもシニア学生顧問団においても少数者である。聖スカラスティカ大学の「一日大学」は、ラウンジ兼会議室の快適なサマーズラウンジで開催された。

2005 年 11 月 7 日に大学構内で開講した「トピックス・デュ・ジュール（現在話題のトピック）」のクラスに参加した。約 35 人の参加者中 3 名が男性だった。講師は、ミネソタ公共ラジオのダールス・ニュース局長のロバート・ケリハー氏であった。デュ・ジュールは最も人気のあるクラスである。シニア・プログラムでも多く取り上げられるようになってきた。一つの主題を長期間にわたりクラスを開講する従来の方法に疑問をなげかけている。その代わり、一学期間六回の講義が、様々な分野の専門職や公職についている男性、女性両方の地元住民に提供されている。2006 年春に開講したクラスと講師の名前を以下にあげる。

地域社会及び大学への公共サービス

年間ドルス市民賞受賞者、ジャック・テスケ

サタンの援助者：欧州魔女熱に関する考察

元歴史学教授、メレディス・メドラー博士

ノース・ショー地域の四季

写真家・グーズベリー国立公園管理者、ポール・サンドバーグ

バーナード・シルバーシュタイン：移民、企業家、そして宗教的指導者

デニス・ラムキン

高齢者法：健康管理指令

弁護士、ピーター・ラドセヴィッチ

盆栽：時代の幻想

「盆栽男」デイブ・セヴァーソン

2005 年 11 月 8 日にヴァージニア市（ミネソタ州）のルーテル教会を会場に開催されたオフ・キャンパス講座に参加した。「真に偉大な短編」と題する 6 週間の講座だった。参加者は、聖スカラスティカ大学の教授の指導の元、1840 年から現代に至る著名な作家の短編について議論した。その日は 19 名の女性が参加していた。このクラスは、郊外で開催される他のクラス同様に、財政的援助を受けている。唯一の男性は、講師の教師だけで

あった。活気に満ちた議論は深く思索に富んでいた。議論の中で私が特に印象深く覚えているのは、「医者には肉体に癒しを与えるが、芸術は魂に癒しをあたえる。」ということばである。

上記の2講座に参加して、私は、講座の参加者の個々の行動や参加意欲、参加者と講師、参加者同士の意見交換を観察し、さらに隣に座っていた人とエメリタス大学について話をする機会を得た。この時の観察と会員との会話から、このクラスの経験はシニア大学で期待されている生涯学習の知的関心と社会的要求の両方の目的に適った内容であると感じた。

2006年4月10日に私は、会衆派教会を会場に開催されたエメリタス大学のボード（顧問団）の会議に出席した。この種の会議はかつて大学構内で行われていたが、会員の便宜の状況調査をするために、会場をこの教会にした。大学外の場所を使用することは複雑な気持ちになるとメンバーは語った。大学構内の使用のほうを彼等は好んでいるようだった。ボードには、12名中男性4名と女性8名から構成されている。参加者4名とプログラムのコーディネーターはダールズ市民である。その他の参加者は、グランド・ラピッツ、リトル・マレイス、ナイフ・リバー、ヴァージニア、グランド・マレイス、マウンテン・アイアン、ツー・ハーバース（ミネソタ州北西部各地）から出席していた。ボードのメンバーは、プログラムのコーディネーターに自分たちの興味の範囲を伝えることができる。エメリタス大学参加者でボードに参加を望む人は席の空きがあれば多くの場合参加することができる。任期は3年で2期連続在籍できる。2期連続在籍後は以前と同様の条件で3年間後に復帰することが可能である。

プログラム・コーディネーターはボード会議の進行役を務める。メンバーの一人が書記をするが、ボードには事務職員はいない。会議の要旨は、ボードの意見として生涯教育プログラム計画編成に反映されていく。

その日は一番目の議題「50歳以上のフィットネス」について話し合った。これはシニア対象の5日間のフィットネス・キャンプについての提案である。宿泊は大学の寮、フィットネス活動は新アスレチック・センターが提案されていた。この案に対する関心が盛り上がり過ぎていたので、コーディネーターはボードメンバーに意見を求めた。関心が低い理由は、タイトルのつけ方、コスト、地元住民はダールズ・フィットネスセンターのプログラムに参加していること、一週間健康と食生活だけのプログラムではアピール度が十分ではない等があげられた。コーディネーターはその日の話し合いで出た質問や提案を計画作成者に伝える約束をした。その後この提案は「キャンプ・キッツ・アゲン」に名称を変えて2006年7月23日から29日まで開催されることになったことを最近知った。これは女性対象のプログラムで、ダールズ市内及び周辺での親睦的活動や「遠足」も計画に加

えられた。約 12 名の女性が登録している。

ボード会議の議題には春学期クラスの案内も含まれていた。約 70 名のメンバーが 6 クラスに登録を済ませていた。さらに 60 名が学習機会のお祭り「メイ・フェスト」に登録した。それ以外の議題は、2006-2007 年度のボード会議の場所とダルースの講座の場所の可能性について話をした。ボードメンバーは、エメリタス大学の講座もボード会議も大学構内で開催への強い希望を表明した。コーディネーターは、大学教員側もキャンパスでのシニア教育を支持する思いがあると語った。メンバーは、エメリタス講座が大学構内のシニア教育専門の建物で開催されるよう希望を述べた。構内の講座に最近では約 30 名が出席していた。

ホーム・スクールの家族が最近エメリタスの講座に関心を示していることの問題点をボードメンバーが述べた。この件についての話し合いが多少持たれたが、賛否の意思表示はなかった。その場の参加者も一般的なエメリタス大学のメンバーも通常のシニア・プログラムの中にホーム・スクールの子供や家族を招くことには積極的ではないように思われる。

2006-2007 年度のクラスが、ミネソタ・ヒューマニティズ・コミッション及びその他の基金団体から受ける予定の資金援助について討議をした。会議は、2006 年 5 月 8 日予定の「ボード感謝昼食会」について報告がされた後即座に解散となった。

研究結果 9-1：エメリタス・シニア大学参加者へのインタビュー

インタビューの男女 7 名は、エメリタス・プログラムのコーディネーターがメンバーの代表として推薦してくれた。面談は（一名以外は）少なくとも 1～2 時間だった。2 組の夫婦をインタビューした時は、それぞれの自宅を訪問した。女性二人には、西ダルース市のビーナーズ・カフェとツー・ハーバーズ市のヴァニラ・ビーン・カフェで各々に会った。最後の女性とは電話で 30 分くらいの話をした。この面談用の質問と議題は添付 A にある。一件の例外を除いて、全ての面談の前に各自へ質問表を事前に配布した。例外の一件は、面談の始まる直前にその場でコピーを手渡した。

二組の夫婦はノース・ショア地域（スペリオル湖のミネソタ州側湖岸域）に住んでいる。（インタビューは便宜上仮名を使用）最初の夫婦アリスとボブ（仮名）は、20 数年前に引退した。そのころ住んでいた家に今も住んでいる。70 代後半のボブはハイキングが趣味で、ノース・ショア・ハイキングコース保護団体に所属している。ボブはつい最近までテニスを楽しみ、地域のリクリエーション審議会のメンバーをしていた。アリスも地域活動に参加、読書グループと裁縫グループのメンバーである。二人のライフワークはミネソタ州南部の教育問題である。ミネソタ州南部の中学校でボブは社会科の教師をし、アリスは様々

なクラスを教えていた。

ボブもアリスもエメリタス・プログラムに参加して18年になり、両者ともボード・メンバーを何期か務めた。歴史、文学、トピックス・デュ・ジュール（現在話題のトピック）が彼等の関心が最も高い科目である。彼等はエメリタス・プログラムの長所を二点述べた。プログラム調査表が毎年配布され、クラスに関する各自の意見や批評を記入し伝達することができる。

プログラムに短所はほとんど見いだせないという両者とも述べていたが、アリスはホーム・スクールの子弟と両親の参加に関しては、現状に対する不満が解決するまではエメリタスを休むことにしたと語った。エメリタスがホーム・スクールの子供たちをこのまま受け入れ続けるのなら、自分がエメリタスに戻る気はないとアリスは述べた。二人ともスピリチュアリティに関するクラスへの興味は特に表明しなかった。スピリチュアリティを学ぶことに反対ではないが、単に興味がないだけだと述べた。アリスの父は超保守的なプロテスタント教会の牧師だったが、成人期のアリスの人生は父の信仰とは関係がなくなっていた。

二組目のキャロルとデイビットの住まいはノース・ショア北部の湖岸に面した瀟洒な地域にある。キャロルは70代後半、デイビットは80歳になる。夫妻ともよく散歩をし、健康そうである。8年前にツイン・シティの北部から現在の家に越してきた。二人は造園業関連の会社経営で成功を収め、人生の大半をこのビジネスに関わってきた。驚いたことに、デイビットが園芸学を学んだのは第二次大戦後半と朝鮮戦争の軍隊経験からであった。キャロルは、元々は理学療法士をしていたが、花や芝を扱うビジネスパートナーへとキャリアを変えた。

キャロルとデイビットはエメリタス・プログラムを5年間受講している。この夫妻が好きな分野も、歴史、文学、トピックス・デュ・ジュールである。ボード・メンバーの経験はまだない。二人は、年2回開かれる行事「大学一日体験」のすばらしさについてふれ、様々な講演や音楽と昼食があり現メンバーにも新入会者にも楽しい時間だと語った。講座は大学構内で開かれるほうが楽しくて、デイビットとキャロルだけでなく周辺地域に住む他のメンバーにとっても、ダルースのエメリタス・プログラムの先生たちと再会することができ良い機会になると述べた。比較的新しく加わったメンバーからの提案として、クラスがもっと親しくなるためには、コーヒー・タイムのような時間の希望を述べた。現在のメンバーが自分たちの友人や家族をクラスに誘うのが一番良い方法だと考える。キャロルとデイビットは、エイジング（高齢化）とスピリチュアリティの講座に関心があるが、異なる教会の異なる歴史観を考えると授業の方法に困難が伴うのではないかと疑問に感じている。二人は近所のプロテスタント教会に行っている。

エレンとは西ダルースのカフェで会った。ダルース市の高校で英語の教師をしていたが、15 年前に退職した。現在 70 代のエレンは明るく健康で生き生きとした女性である。教会のリーダーの一人として働らき、地域社会との関わりがある。小学校の読書プログラムのボランティア “Lighthouse for the Blind” “DAC Foundation” “Duluth Area Retired Educator” と仕事をしている。

エレンはエメリタス・プログラムの長年の生徒で、ボードにも 9 年間参加した。他の参加者と同様エメリタス・プログラムに感謝している。クラス、講師、特別行事の全てがレベルが高く、彼女のように忙しい生活に合うようにスケジュールが組まれていることを評価した。エメリタス・プログラムのメンバーや資金の強化は重要だと考えている。今までも何度も問題化している駐車場と交通の便の解消は今後の課題と考えている。

エレンは、スピリチュアリティの成長が自分のプロテスタントとしての信仰と伝統にとって重要であると考えているので、高齢化とスピリチュアリティの講座には関心がある。エレンの教会が教派的に 1999 年を特に「1999 年国際高齢者年」と強調し、その時作成したパンフレットを私に渡してくれた。その中には「高齢者のための連祷」と題する祈りがあった。おそらく礼拝の一部に使われたのだと思う。スピリチュアリティに関する講座では、本や資料をもっと使うほうが話し合いに役立つのではないかと考えている。

フェイスとは、ツー・ハーバーズ市のヴァニラ・ビーン・カフェで会うことにした。彼女は教育関係の仕事に従事後、現在は監督教会（米国聖公会）の平信徒説教師をしている。フェイスはエメリタス・プログラムに 10 年間参加し、現在はボード・メンバーをしている。エメリタスの長所については、これまでのインタビュー同様に長所を述べた。さらにコストの安さ、宗教や倫理関係の講座、積極的参加を促す情熱的な講師によるクラスを高く評価し、エメリタス・プログラムと大学との良好な活動関係に鍵があると考えている。フェイスは、クラスの他のメンバーから様々な人話を聞くことができることや、幼いころ家族がミネソタ州のエリー近辺に別荘を持っていた 8 歳から 22 歳の思い出を振り返りながら書くことができる文章創作のクラスが楽しいと感じている。スピリチュアリティについては、人生の全ての段階に関わる重要な要素であり、特にシニア世代の人々にとってはことさら大切だと考えている。

研究結果 9-2：エメリタス・シニア大学参加者へのインタビュー

私は最終インタビューのためヴァージニア市（ミネソタ州北）のジニーの家を訪問した。彼女は現在 77 歳で、人生の大半をヴァージニア市に住んでいる。短大を出てすぐ勤めた会社では彼女の仕事ぶりが雇用者に高く評価された。一年間の仮雇用の後正式採用され、

会計の分野で活躍した。彼女と社会との関係はヴァージニア市立図書館と音楽にある。彼女の両親が彼女に与えた教育の機会は十分とは言えないが、学び続けることの大切さを彼女に教えた。ジニーは聖スコラスティカ大学付属の高校の卒業生である。

ジニーは、1982年に聖スコラスティカ大学のエメリタス・シニア大学の開始直後に入学し、それ以来今日まで参加している。彼女はクック市（ミネソタ州北）に住む90歳の女性について話してくれた。この婦人はおそらくシニア大学のメンバーの最年長者だそうだ。ジニーによると、シニア大学学生評議委員12名中10名は元教職だが、元教師ではないメンバーがこの90歳の婦人とジニーの2名だと語った。ジニーは読書や音楽と共に、たくさんの人に出会い、たくさんの人と長い年月共に学ぶことを楽しんでいる。ジニーは、多くの時間をボランティアとして教えてくれる講師の先生たちに感謝している。私たちは、シニア教育プログラムのスピリチュアリティについて語った。スピリチュアリティは宗教だけでなく関連する倫理やキリスト教会史においても重要なエメリタス・シニア大学のプログラムであるとジニーは思うと語った。このように話をした後に、ジニーは自分が癌であることを私に打ち明けた。私たちはお互いのために祈りの約束を交わした。（訳：下田千代美）

結 論

本論文の目的は、第三の冒頭で述べたように、大学が主催する生涯学習プログラムに参加する動機を探究し、このプログラムから参加者が人生に受けとめる利点の調査及び信仰的伝統を持つ大学の既存の成人プログラムの検証にある。さらに生涯学習におけるスピリチュアリティとエイジングの検討を、参加者の関心と主催大学側の使命感の観点の両方から検証した。

急速に変化する本分野の文献を検証した結果、シニア世代が学習に参加する理由の第一は、学ぶこと自体の楽しさ、第二は論理と内省する技術の習得にあることが判明した。時事的な分野への関心、既知の分野及び新たな分野を選んだ学習においても同様の理由が考えられる。参加者が、学習内容、充実した時間、クラスの人的交流及びその他のプログラム活動を通して重視している価値観は、精神的満足感（well-being）にある。

特に要望の高いトピックが参加者の学習意欲に応じて決定されていることが、シニア・プログラム管理者や参加者へのインタビューからわかる。スピリチュアリティとエイジングに関する質問には、インタビュー中5名がクラスに興味を持ち、今後のプログラムへの一層の関心を示した。スピリチュアルな成長と理解への関心は特にシニア世代には重要なことであるが、24年間に及ぶエメリタス・プログラムが提供してきた585クラスの分析

結果からもそのことが明らかである。要望の多いクラスを数字で表すと次のような結果になる。文学（18.76%）、社会学／文化（17.00%）、行政／歴史／地理（13.93%）、宗教／スピリチュアリティ（8.8%）。この4分野が全体の50%以上を占める。音楽／ダンス（8.33%）、絵画／ドラマ（映画も含む）（8.08%）のクラスではスピリチュアリティに関する要望が特に高くなることが多い。その他のクラス表と全体割合に関しては添付Cを参照。

シニアが生涯教育プログラムに参加して良かったと感じる理由は、各自のニーズの満たされることが強い動機となっている。以前引用したメリアム・キム研究（2004）の要約を見ると明らかなように、学習内容が技術的にも内容的にも刺激的であり、友人との親交を暖め、さらに新たな友人との出会いがある時、心理的にも社会的にも来た甲斐があったと感じる。個々の健康や生きる意欲がシニア世代の人生だけではなく、彼等の家族、彼等が住む地域社会を豊かに変えていく。2名を除くインタビューの全員が、学習の喜びを通して心理的、肉体的健康と生きがいを感じ、スピリチュアリティの個人的意味を強く理解し、何かを学ぶことと、他の人との結がりを作りながら生きていく人生と考えている。

信仰的伝統の大学にシニア対象の生涯学習プログラムがある場合、このプログラムを大学の使命感の達成には必須の存在であるとの認識がある。主催大学がシニア・プログラムの提供に価値があると感じる最大の理由である。さらに、大学が提供するプログラムに参加する住民が、教育機会を提供する大学機関と積極的・良好な関係を築くことは、高齢者向け社会資本の向上になると大学管理者側は考える。

大学のシニア・プログラムの実際の運営には多種多様な問題が山づみである。調査対象の18大学は様々な成人対象のプログラムを提供しているが、その中の6大学は、若者向けの通常の教育に付随したシニア向けプログラムを行っている。シニア・プログラムを積極的に進める大学と、通常のクラスにシニアの参加（聴講または単位取得）を促す大学が6校。シニア・プログラムを持たない4大学であるが、シニアを含めた成人教育の可能性を探索中の大学や、その他では建学の使命に関連したプログラムを作成し住民のニーズに応えようとするプログラムを検討中である。

シニア大学が抱える目下の課題は、ホスト大学から継続的にサポートを受ける必要性があることである。事務職員と教職員が、管理者や講師としてシニア・プログラムを支えていこうとする意欲が必須である。シニアメンバーの中で、カリキュラムその他の活動の計画作成の補助役としてリーダー的学生を探す困難がある。私立大学の財源問題が拡大していくなか、特にシニア・プログラムがその影響を受けている。シニア・プログラムの財源は、大学からの給与のサポートと管理経費の補助がある。その他の財源は、寄付金、僅かな公的補助、（ミネソタ州人間性委員会、MHC）、参加者の授業料、その他の資金収集努

力によって支えられている。

シニア・プログラムの開講を検討中の大学にとって現在憂慮に感じるのは、大学の提供するプログラムに参加を希望する卒業生その他の住民の興味の正しい判断と見極めである。ターゲットとなるシニアに対するプログラムの紹介と提供、資金源の拡大の可能性に対する不安がある。

生涯教育の機会に興味を持つシニアだけでなく、キリスト教信仰の伝統を持つ大学の既存のプログラムを受講するメンバーの見解、プログラムの短所、長所に関する報告に関する情報は、シニア本人のみならず、教育関係機関にも重要な意義がある。

本論の結論と推薦は、本研究によって、大学が個人の生きがいを求めるシニア世代に学習の楽しさを提供する時に必要な実際的情報、哲学的洞察とスピリチュアルな動機が提供されることである。今後必要とされる研究について次に指摘する。

第二章 ワークショップ報告（模擬シニア大学）

「ME-CUSS（大学のシニアプログラムを考える会）」は、2006年9月に一般のシニア市民からアンケートに協力者を公募するところからスタートした。条件は、「60歳以上、英文読解力（英文の文献を読むため）、10月と11月の二回参加可能、宿題の発表」の4項目の条件をクリアできるシニア市民であることである。（添付1）協力者として4名の一般市民が集まった。（各自の状況は、「はじめに」を参照）氏名は、各自が担当した英文翻訳の後に記載がある。集合日の前に事前アンケートへの記入と割り当ての英文の翻訳の準備をお願いした。ワークショップでは翻訳の発表と発表内容について参加者に自由に意見の交換をお願いした。各意見の要約と2回目の集合日の最後にロジャーズ作成のアンケートに記入に関する分析はセクション4にある。

ワークショップ開始前に事前アンケート（添付1）と翻訳箇所の配布をした。米国のシニア大学では宿題や試験はないが、今回のME-CUSSで論文の一部を事前に翻訳し発表をお願いしたのは、シニア大学に関する日本語の資料がなく英語の文献を読む必要があったからである。さらに、その内容に関する感想を述べるのが各自に事前に宿題として割り当てられた。ワークショップは二度開催した。（2006年10月21日と11月11日、午前10時から12時までの2時間、合計4時間）ロジャーズ論文が強調するシニア大学の目的の一つが社会的・社会的側面であるので、ME-CUSSも一回の開催ではなく複数回の開催が望ましいとの判断から、2回開催した。一般募集の段階で、2回継続参加できる市民をメ

ンバーとして募集した。2回のワークショップ後 ME-CUSS のメンバーから「エルダーホステル」への強い関心が示された。

今後の調査課題として「旅行と学習」を合体させたシニアの大学教育「エルダーホステル」への参加，または，ボランティアとしての参加へ強い関心が示された。エルダーホステルは，「education+vacation = 大学の夏期間の寮とシニアの学習と旅行」による大学主催のシニア・プログラムである。米国の「エルダーホステル」は大学のアウトリーチ・プログラム（地域貢献）として全米に認知されたプログラムであり，社会運動としても認知度が高い。（日米の現状に関する詳細は第三章，第四章を参照。）

ロジャーズ論文の読後に，ME-CUSS のメンバーから日米の文化的違いが指摘された。

ロジャーズ論文の焦点は，年齢とともに成長する人間のスピリチュアリティと生涯教育にある。その問題（スピリチュアリティ）に日本人も関心が強く，それについて話しあう必要性も感じてはいるが，社会の公の場ではお互いのスピリチュアリティについて日常的话题として話が交わされることが少ないことや，元職場の懇親会の席の話題も家族の話題だけに終始する傾向があることがメンバーから指摘された。しかし機会があれば「新しい世界を学ぶつきない興味」からシニア大学への参加だけでなく，クラスの中でリーダーシップの責任を果たすことに対しても関心が示された。（ワークショップの議論の中で交わされた意見は添付2）

ワークショップ後のアンケート調査で全体に共通する関心は，「時事問題」と「高齢化・スピリチュアリティ・死生学」の分野に示され，「色々な人との出会いを通して意味のある人生にする」ことが最大の理由に挙げられている。時期的には，週日よりも週末や夏期間の一週間の講座への関心が高かった。（アンケート内容は添付3）

ME-CUSS のメンバーは英会話を継続的に学習し，ボランティア通訳として活躍している方々であったので，今後の学習の興味分野も英語学習に対する要望も述べられた。

第三章 米国のエルダーホステル

ユージン・ミルズによると，米国のシニア大学には，通年もしくは一学期間の講座を受講する「シニア・プログラム」，教育と旅を組み合わせた「エルダーホステル」，シニア自らが立案・組織し，エルダーがエルダーに教える「自主学习会運動（institute movement）」がある。

シニア大学が，シニアが居住している地域に根ざした大学のプログラムであり，学習を生活の中に取り入れることを特徴としているが，エルダーホステルは大学のアウトリー

チ・プログラム（地域貢献）としてユニークな役割を果たしている。（「エルダーホステル物語」）

エルダーホステルの生みの親は、ニューハンプシャー大学のマーティン・ノールトン（Martin P. Knowlton）と友人のデイビット・ビアンコ（David Bianco）である。二人は、北欧諸国にある伝統的寄宿制の成人教育の学校（フォークハイスクール）の制度を土台に、「真剣に教育を受けたい人」のための教育改革を議論しアイデアを生み出した。彼らは学習機会を求める高齢者を対象に大学の教育資源を活用した、宿泊型の学習サービスを提供するプログラムをエルダーホステルと位置づけた（1974年）。

「学習（education）」と「旅（vacation）」を結合した大学開放型のキャンパスライフは、高齢者を社会の枠組みの中に閉じ込めずに、そこから一歩踏み出させ、社会の一員として、ニューパラダイムの創造者として奮起させた。エルダーホステルは「老年は静止の時期」という固定観念を打破することにある。この打破を教育界の重要な責務とした。「タイム」誌に「今世紀で最もユニークな社会運動」と評された。（Jul. 23, 1984）

宿泊施設は通常は大学の寮を使用するので、簡素である。しかし、それは問題とはならない。それより参加者は「物質からはなれ、内面の世界における成長」を重視し、過去の経歴は千差万別だが、「人生における新しい関係」、平等な学友としての関係に関心があるということだ。エルダーホステルの土台が、ロジャーズ論文の焦点のスピリチュアリティと同様の視点にある。

エルダーホステルの人気クラスが、ロジャーズ論文で指摘された学習理由と同様に、生きる意味を考えるクラス、哲学、文学、歴史が中心となっている。生涯学び続ける意欲、人生の質的向上、人間関係の拡大、生きる意味を考える性質の深化、神との関係の強化、人生の意義について考えるクラス等である。

欧米の文化では、自分のスピリチュアリティを初めて旅先で会った人と意見を交わすことが、「リ・クリエーション＝re-creation（再創造）」という意味での最高の「娯楽」であり、最高の「教養」と感じることでできる文化的土台がある。このフレームには、基本的には、教師や生徒の上下の関係もなく、その場でその時間を共有する中での人間関係であり、教えあうのではなく、互いに共有しあう知識の伝統がある。そういう意味では、エルダーホステルは、きわめて欧米的文化の中で結実した実といえる。それに対して日本のエルダーホステルはどのようなプログラムなのであろうか。日本の現状と問題点については、次の四章で述べる。

第四章 日本のエルダーホステル

日本の「エルダーホステル」の開拓者は、日本の大学組織ではない。元大阪アメリカンセンター図書館司書の豊後レイコさんが建て上げたNPO法人「エルダーホステル協会」（大阪本部）である。日本人対象と米国人対象の合計3種類がある。（1. 日本国内講座, 2. 日本人のための海外講座, 3. 米人のための日本学講座）日本の大学の多くは正規学生以外の宿泊可能な寮がなく、正規学生以外を対象にしていなかったため、日本のエルダーホステルは、開催都市の国際交流団体、YMCAなどの教育研修機関、地方自治体の国際交流課が運営主体となっている。（「エルダーホステル物語」212）「エルダーホステル協会」以外では、特定非営利活動法人「エルダー旅倶楽部（<http://www.elder-tabi.jp/index.html>）」（東京本部、代表大社充氏）がある。地域振興、観光開発も含めた事業パートナー（コーディネーター）を全国各地に募集している。主な募集対象に、大学、短期大学等の高等教育機関、博物館、美術館などの社会教育施設、自治体、町などのグループがある。北海道では芦別市、旭川市の行政や札幌の「自由学校」、ニセコの冒険学校などの民間組織が関わっている。

札幌を中心とする北海道では、NPO法人「エルダーホステル協会」主催の講座が20年ほど前（1988～1991）に開催されたことがある。米国エルダーホステルの講座が札幌市内のホテルを宿泊施設に、豊平館などの札幌周辺の公共施設で英語の講義が行われた。（米国 Elderhostel, Inc. <http://www.elderhostel.org/welcome/home.asp>）

現在札幌YMCA理事の藤田氏の説明（2006. 11. 24）によると、その当時の受け入れ機関が札幌YMCAだったが、自ら企画立案した講座ではなく、あくまでも「エルダーホステル協会」の依頼をうけ行ったもので、その後協会が北海道計画を中止し、現在は行われていない。中止の理由は、YMCAディレクター佐藤雅一氏の説明（2006. 12. 8）によると、九州から北海道まで列車の個室で日本訪問という企画であったが、トワイライトエクスプレスの部屋の確保に困難が伴い中止を余儀なくされたことと、他の企画に比較すると料金的に割高になっている点であると考えられる。今後北海道で開催される可能性は、全くないわけではない。（「エルダーホステル協会」専務理事大原美和子氏へのインタビューより、2006. 12. 4）ただし、北海道で年2回開催できる受け入れ組織があること、2年以上前に米国エルダーホステルに企画承認を得ること等の条件がある。大学との協力関係については、人的、物質的資源を活用できることは学習効果にプラスであり、学生生活の体感、コストを抑えられる等のメリットがあると考えている。世界遺産の知床やアイヌ関係の文化

は大いに興味ある分野であり関心があると、考えている。

エルダーホステルの講座の二番目の「日本人のための海外講座」は、日本人のために日本語で行われる海外講座である。今まで、アメリカの中西部の大学でのマイノリティー研究やロシアの日本語教育を行う学校にボランティアとして参加するなどの企画が行われた。「エルダーホステル協会」と「エルダー旅倶楽部」の両民間組織の企画がある。両方の組織のプログラムに参加されたメンバーによると、参加者は各組織発行の機関誌を定期購読し、各自興味の向かう分野を双方のプログラムから自由選択し参加している。(北海道教育大学名誉教授伊藤千秋先生ご夫妻へのインタビューから)

「エルダー旅倶楽部」代表の理事長大社充氏は、「エルダーホステルは、学習のサービス」つまりサービスの提供と考えるので、日本の大学組織とエルダーホステル企画との協力関係は難しいと考えている。大社氏は、米国のエルダーホステル講座に直接参加した経験から、米国のエルダーホステル人気は、米国の大学を卒業した学生にとって大学がいつまでも尊敬と憧れの対象であり、シニアになっても変わらないその思いに支えられていると語った。(米 Elderhostel, Inc. 米国国内のエルダーホステル講座に体験参加。<http://www.elder-tabi.jp/aboutus/genten.html>) つまり米国では、若い時代の大学での勉学は決して甘やかされる場所ではなく、厳しく勉学をする場として、自らの精神を鍛えてくれる場であったからこそ、シニアになってもなお大学への尊敬と憧れを持つ一定の社会層があると考ええる。その社会層は、教養月刊誌「ナショナル・ジオグラフィック National Geographic」の購買層や「ディスカバリーチャンネル (Discovery Channel)」の視聴層にはほぼ重なりと見ている。知的学習が人生に不可欠の領域であり娯楽 (re-creation 再創造) と理解する社会層である。さらに、欧米人にとって公開の場の議論は娯楽であり、生徒同士、教師と生徒が互いに教えあい、意見を交流することに至極の喜びを感じる文化を共有している。その文化を土台にエルダーホステルが存在すると、考える。しかしながら、日本の大学は異なる文化的背景にあるので、日本のエルダーホステルのプログラムは、米国方式のエルダーホステルではなく、職人などの技術や体験型の経験を中心とした学習と観光のサービスの提供が必須であると大社氏は考えている。(大社充氏へのインタビューより、2006. 12. 8)

結 論 今後の展望

2007 年から定年を迎える「団塊の世代」の定年後の行動について、この世代の知識欲の高さから考えて、大学で学ぶ様々な形態への関心が高まっている。(2007 年 1 月 1 日読売新聞の特集「我ら団塊学びの時」) これまでのシニアよりも多くの生き方の選択肢の中

から、大学での「知的学習」がその一つになる可能性はさらに大きくなってきた。この要望に応える米国の大学の視点を知ることから、これからの日本の大学が学べる示唆が多々あることに気づく。米国のシニア・プログラムが、知的学習が新たな自分を発見する「再創造」の時であるという基本的概念や、若い時にその意識を育てるシステム、シニア・プログラム専任のコーディネーターの存在、「物質からはなれ、内面の世界における成長」を重視するスピリチュアリティの成長への理解、シニア・プログラムの提供は地域への大きな貢献になると考え、大学側がこのプログラムを誇りに思っている点である。日本で同様のエルダーホステル制度の困難さの原因を大学寮のない施設の有無を問題点としてあげる声もあるが、根本的課題は、日本の大学生が自分の学んだ大学を誇りに思えること、学生が誇りに思えるような教育プログラムの提供が大学にあること、学問の習得と共に人格の形成の場としての大学の機能が生きていることではないだろうか。ロジャーズ論文の焦点の、大学が永遠に成長するスピリチュアリティを知的に学習する機会であることではないだろうか。本研究に ME-CUSS メンバーからの積極的協力の提供があったように、シニア市民や大学の退職教員が地域の様々なグループ（米の場合は地域の教会）の協力を得ながら、米国のシニア大学が成長していったように、日本でもエルダーホステルを契機に大学によるシニア大学の発展の可能性があると考えられる。

参 考 資 料

1. Ingram, Kristen Johnson "Wine at the End of the Feast" 2003
2. ユージン・S・ミルズ, 「エルダーホステル物語」豊後レイコ・柏岡豊英・藪野祐三訳 1995
3. アッチェリー, ロバート・C&バルシュ・S・アマンダ, 「ジェロントロジー～加齢の価値と社会の力学～」宮内康二編訳 2005
4. 小野元之・香川正弘編著, 「広がる学び, 開かれる大学」ミネルヴァ書房 1998
5. 小野元之・三浦嘉久編著, 「生涯学習の展開」2002
6. ルイス・ローウィ&ダーレン・オコーナー, 「高齢社会を生きる高齢社会に学ぶ」香川正弘・西出郁世・鈴木秀幸訳 1995
7. 稲垣久和, 「宗教と公共哲学—生活世界のスピリチュアリティ」東京大学出版会 2004
8. A.E. マクグラス, 「キリスト教の霊性」稲垣久和訳 2005
9. EH News (エルダーホステル協会広報誌 2006年11・12月号)
10. 「エルダーホステルに見る学習プログラムの現状と課題」大社充 (広陵女子短期大学研究紀要 1996)
11. 生涯教育・シニア大学, 世界の学会「University of Strathclyde, Center for Lifelong Learning」

本研究は「平成18年度札幌大学共同研究プロジェクト」による成果の一部である。

(添付 1)

INTRODUCTION TO LIFELONG LEARNING

Name: _____ Year of your birth: _____

Address: _____

Contact information: telephone _____ email address: _____

Single _____ Married _____ Widowed _____

Children

Places you have lived: _____

Your opportunities for education as a child/young person:

_____ ¥ _____

College/University education: Number of years _____

Degree(s) completed _____

Subject/studies you most enjoyed:

Life work (for income) (Please list all work of your work experience)

Other hobbies and interests

What do you hope to do in retirement?

Have you heard about College/University Lifelong Learning programs for elder adults, sometimes called Learning in Retirement? (NOTE: The classes offered are usually non-credit, but of scholarly quality, with no exams. Costs are modest, usually about \$35-\$50 per six week class in programs in Duluth, MN. This is different from other older adult learning programs intended for employment needs, or advanced degrees related to work.)

Questions you have about lifelong learning:

Anything else you would like to say:

(添付 2)

- ・スピリチュアリティに関して、日本の茶道の精神との相似性がある。
- ・日本人にとっては、生きることと心の内面を語ることが、必ずしも日常化されていない、一つの文化となっていない気がする。
- ・大学が行うプログラムではないが、札幌にも老人大学や UHB 大学等の「シニア大学」などの行政や企業が主催するシニア対象のプログラムがある。アメリカではなぜ大学が特別な存在なのか？
- ・メンバーの知り合いに、UHB 大学に十年以上通っている人がいる。しかし、日本人の受講生どうしが、お互いのスピリチュアリティについて日常の会話として話されていないような気がする。
- ・米国のシニア教育制度が、日本と比較すると制度的にずいぶん進んでいるのは事実だが、それでも、彼等は完成されたものではなく、今なお改良と努力の格闘の日々であることが、ロジャーズ論文を読んで感じた。
- ・米国のシニアの学習意欲の高さ、元教職関係の退職者の意欲の高さに感銘。日本のシニア、元教職関係者が必ずしも退職後に本を読んだり、新たな分野を学んでいるとは言いがたい印象だが、ベビーブーマー世代のシニアの生活はこれまでとは異なるスタイルになるような気がする。
(ベビーブーマー：1946-64 年生まれの世代：現在 41 歳から 59 歳)
- ・札幌の大学でエルダーホステルが実現した際には、ボランティアとしてぜひ奉仕したい。
- ・今現在は、ボランティアの歴史ガイドとして日々勉強が必須であり、じぶんの周りのシニアたちも元気にボランティアとして日々研鑽を積んでいるが、もし、将来札幌の大学に、シニア大学が実現した場合、自分も学んでみたいと思う。

（添付 3）

SURVEY OF INTEREST FOR LIFELONG LEARNING PROGRAM FOR ELDER ADULTS

| | <u>Strong interest</u> | <u>Moderate interest</u> | <u>Little interest</u> | <u>No interest</u> |
|--|----------------------------|------------------------------|----------------------------|--------------------------|
| 1. My interest in an elder adult learning program at Sapporo University. | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |
| 2. An annual weekend summer event | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |
| 3. An annual week-long summer event | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |
| 4. Classes offered throughout the typical school year | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |
| 5. My study interests would include: | | | | |
| Literature | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |
| Biology/Chemistry | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |
| other Physical Sciences | | | | |
| Psychology/Mental Health | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |
| Physical Health and Aging | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |
| Music | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |
| Sing in a choir during the event (no auditions required) | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |
| Graphic Arts | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |
| Theater/Dance | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |
| Social Sciences | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |
| Philosophy | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |
| Religious Studies | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |
| Biblical Studies | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |
| Current events/Government/Politics | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |
| World/American History | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |
| Christian History | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |
| Aging and Spiritual Life | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |

Other suggestions _____

| | <u>Strong interest</u> | <u>Moderate interest</u> | <u>Little interest</u> | <u>No interest</u> |
|--|----------------------------|------------------------------|----------------------------|--------------------------|
| 6. I would appreciate considering personal faith and spirituality, and other spiritual traditions as relevant to studies in these subjects | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |
| 7. I would be willing to teach or facilitate a class or workshop | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |
| 8. My reasons for participating in a senior lifelong learning program would be: | | | | |
| a. a particular educational goal | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |
| b. a meaningful way to enjoy social time | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |
| c. curiosity for learning in familiar and new areas of study | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |
| d. personal well-being, including staying mentally/ thoughtfully engaged in life | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |
| | Yes | No | | |
| 9. I have participated in a senior adult learning program offered by a college or university | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | | |

Name of college/university/other site: _____

Type of program (classes on campus, off campus, other information) _____

General Information:

10. What is your age?

a. 55-58 b. 59-64 c. 65-69 d. 70-75 e. 76-80 f. 81 or older

11. What is the highest level of education you have had opportunity to achieve? (circle answer)

a. Some college b. College graduate c. Some postgraduate study without a degree

d. Master's degree e. Doctorate f. Multiple advanced degrees

12. What is was/is your life work experience? (circle one or more)

- a. Laborer b. Military c. Clerical d. Sales e. Service worker f. Managerial
g. Professional/technical h. Homemaker i. Other _____

OPTIONAL QUESTION AND EXPLANATION

13. What is the current approximate annual income of your household: (circle answer)

- a. under \$14,999 b. \$15,000 – \$24,999 c. \$25,000 – \$34,999 d. \$35,000 – \$49,000
e. \$50,000 – \$74,999 f. \$75,000 – \$99,999 g. \$100,000 or more h. decline to answer

(REASON FOR QUESTION: To learn resources of participants as a guideline for programming costs—adapt to reflect Japanese money system.)

Please note: We appreciate your participation in this survey. Feel free to leave blank any questions you prefer not to answer.

If you are willing to provide contact information, please do so:

Name: _____

Address: _____

Telephone and/or e-mail _____

Other comments or suggestions:

(添付 4)

APPENDIX C

添付 C

COLLEGE OF ST. SCHOLASTICA, EMERITUS COLLEGE

聖スコラスティカ大学のエメリタス・シニア大学

Classes offered between fall, 1982 and spring, 2006

1982 年から 2006 年春までに開催されたクラス

| <u>Class</u> クラス | <u>% of</u> <u>Total</u> 割合 | <u>Total No. of</u> <u>Classes</u> クラス数 |
|---|-----------------------------------|---|
| Literature 文学 | 18.76 | 109.75 |
| Sociology/Culture 社会学・文化 | 17.00 | 99.50 |
| Gov't/History/Geography 行政・歴史・地理 | 13.93 | 81.50 |
| Religion/Spirituality 宗教・スピリチュアリティ | 8.80 | 51.50 |
| Music/Dance 音楽・ダンス | 8.33 | 48.75 |
| Visual Art/Drama (Inc. film) 絵画・ドラマ (映画) | 8.08 | 47.25 |
| Health/Financial 健康・財政 | 7.69 | 45.00 |
| Writing (memoir/other) 文章作成 (思い出・その他) | 6.20 | 36.25 |
| Computer/Technology コンピューター・テクノロジー | 3.25 | 19.00 |
| Gardening/Animals ガーデニング・動物 | 1.88 | 11.00 |
| Psychology 心理学 | 1.70 | 10.00 |
| Archeology 考古学 | 1.37 | 8.00 |
| Topics du Jour 時事問題 | 1.20 | 7.00 |
| Philosophy 哲学 | 1.20 | 7.00 |
| Ethics 倫理 | <u>0.60</u> | <u>3.50</u> |
| TOTALS 総計 | 99.99 | 585.00 |

| Total classes per year | |
|-------------------------------|------------|
| 一年間総クラス数 | |
| 1982 | 3 |
| 1983 | 10 |
| 1984 | 16 |
| 1985 | 14 |
| 1986 | 18 |
| 1987 | 16 |
| 1988 | 29 |
| 1989 | 39 |
| 1990 | 42 |
| 1991 | 32 |
| 1992 | 22 |
| 1993 | 39 |
| 1994 | 41 |
| 1995 | 28 |
| 1996 | 39 |
| 1997 | 35 |
| 1998 | 24 |
| 1999 | 30 |
| 2000 | 22 |
| 2001 | 21 |
| 2002 | 20 |
| 2003 | 14 |
| 2004 | 13 |
| 2005 | 12 |
| 2006 | <u>6</u> |
| Total | 585 |
| 総計 | |